第29回 バイオセラピィ学会学術集会総会共催 ランチョンセミナー

「肺癌免疫療法の現状と課題」

日時

2016年12月1日（木）
12:10～13:10

会場

久留米シティプラザ（福岡県久留米市六ツ門町8-1）
第1会場（ザ・グランドホール）

座　長　近畿大学医学部 外科学 教授
奥野 清隆 先生

演　者　九州大学大学院 呼吸器内科学分野 教授
中西 洋一 先生

【共催】第29回バイオセラピィ学会学術集会総会 ／ 株式会社グリーンペプタイド

ランチョンセミナー

「肺癌免疫療法の現状と課題」抄録

演 者

九州大学大学院
呼吸器内科学分野 教授
中西 洋一

2015年に免疫チェックポイント阻害薬ニボルマブが肺癌で承認された。肺癌に対する免疫療法薬として、初めてその有効性が科学的に検証された薬剤として大きな注目を集めている。現時点で皮膚悪性黒色腫、腎癌にも承認されており、対象となるがん種はさらに拡大するであろう。従来の免疫療法が抗腫瘍効果の増強に力点が置かれていたのに対し、本剤は「がんによる免疫監視機構からの逃避」をブロックする点が大きく異なる。PD-1/PD-L1経路の遮断が大きな抗腫瘍効果に繋がることはまさに驚きの一言であり、癌薬物療法における大きなパラダイムシフトである。

これまでの肺癌を対象とした臨床試験の結果から明らかになってきたことは以下のような点である。

1）進行期肺癌の2次治療としての標準的治療薬ドセタキセルとの比較では、ニボルマブは扁平上皮癌、非扁平上皮癌とも有意に生存期間を延長させた。
2）20%の患者では治療効果が2年以上にわたって継続した。
3）一方で40%の患者では無効であった。
4）非扁平上皮癌ではPD-L1発現と治療効果が相関したが、扁平上皮癌ではPD-L1の発現の有無に関わらずドセタキセル以上の治療効果が得られた。
5）副作用はドセタキセルに比べ明らかに低頻度であった。
6）これまでほとんど経験されることのなかった免疫関連有害事象が問題となった。

肺癌診療ガイドラインにおいては2次治療としての選択薬剤に挙げられ、特に扁平上皮癌における本薬剤の位置づけは確固たるものになった。一方で、未経験の免疫関連有害事象が発生している。高頻度のものとしては甲状腺機能障害、間質性肺炎、腸炎、皮膚障害などがある。稀ではあるが、劇症I型糖尿病、重症筋無力症、ぶどう膜炎など副作用は全身臓器にみられる。特に間質性肺炎は我が国において頻度が高く、死亡例も少なからず報告されている。これらの副作用は悪性疾患を診療してきた医療者には経験されたことがないものであり対応に苦慮するケースが少なくない。

これに対する対応策は、診療科・職種横断的−すなわち全病院的取り組みである。我々は、2016年当初に免疫チェックポイント阻害薬適正使用委員会（Team ICI）を結成し、副作用対策、適切な検査・診断の在り方、問題症例の検討などについて取り組んでいる。本講演では、これらの取り組みについて紹介すると共に、今後の癌治療の方向性にも言及したい。